

史遊サロン通信

No.256号
平成29年
1月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井 宏

新年の史遊サロンは一月二十一日です

新しい「史遊サロン」形式にしてから一年になります。気軽な会にしようと考え、会員の方々にあまり負担にならないように進めてきました。ありがたいことに積極的に協力して下さる方もいて、『通信』の原稿は、かなり質の良いものが集まりました。

また、史遊サロン後援の『出版』も、次に示すように、当初予想していた50頁級を大巾に上回る大作ぞろいとなりました。

鯨游海さん 『漢詩の流れ・潮騒録』 280頁
太田精一さん 『誠忠の茶園』 220頁
千坂精一さん 『関東管領始末記』 210頁
平山善之さん 『歴史のさんぽみち』 210頁
諸橋奏さん 近刊『クリオールのたわごと』 190頁

史遊会通信』
その他にも、史遊サロンとは別ですが、中込勝則さんが豪華私家版『白楽天』第一編(第五編(五冊)、総頁数が千三百頁にもなる「超大作」を纏められましたし、山本鎮雄さんも

ハードカバーの『目耕録・定年後の晴耕雨読』を出版されました。

設立当初の『史遊会』の会員資格が、「歴史に関する著書がある者」となっていたことを改めて認識する想いでした。

さて、今年はどうなるでしょうか。

何よりも、昨年は世界中でポピュリズムが吹き荒れましたが、今年はその結果がどのように進んで行くのか、いわば世界史の方向をしっかりと見極めるべき時期です。米国と中国の政治的、経済的、軍事的な鏖張り合いの中で、鬼っ子の韓国のポピュリズムがとて心配です。うっかりすると、米国が在韓米軍を韓国から引き揚げると言い出すかも知れません。

また、平山さんが前号『史遊サロンの「異端」で、日本における「日蓮宗の排他性・攻撃性」を取り上げましたが、世界は宗教問題と民族問題で今やお手上げです。

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の一月二十一日です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。
なお、三月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の三月十八日です。
「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。

第二次世界大戦後、欧米が人為的に成立させた「イスラエル」のために、ユダヤ人は恩恵を得たかもしれませんが、世界は「宗教問題」と「民族問題」に悩み続けています。

一方的な正義感に基づき、米国はイラクやリビアを征圧しましたが、その後はかえって民族・宗教問題のために、米軍の死者の二桁多い民間人の犠牲者を出しています。また、とどまることを知らない難民を生んでEUを翻弄しています。トランプが、米国のイラク・リビア侵略を「ある国の政治体制を強制的に変えれば何が起こるか」と批判しているのに同調したくなります。

その他、平山さん、諸橋さんの著書も色々話題を提供してくれるでしょう。
新年のサロンはこんな話題からはじめて見たいと思います。
(新井 宏)

BUSHIDO
The Soul of Japan

Inazo Nitobe

TUTTLE Publishing

Tokyo | Rutland, Vermont | Singapore

中島 茂

本書は当時三十七歳の新渡戸稲造が日露戦争中の一九〇五年アメリカで出版したものである。

読者の一人であったセオドア・ルーズヴェルト大統領が日露講和斡旋の大役を引き受けたのは、自国の利益のためだけでなく、本書に心打たれたからでもあったと言われる。

私は二十年ほど前、奈良本辰也氏の訳書(三笠書房)を読んだが、この八月たまたま静岡市の書店で原書を手に入れた。

A5版百三十頁ほどの分量であり、軽い気持ちで読めると思ったのだが、読み進んでいくうちに自分の甘さを思い知らされた。

主な理由は二つある。

文章は明晰だが、使用単語は今日の英和辞書での基本語一万語を超えるものが頻繁に使

われ一欧米の知識人を念頭において書かれたもの故、当然とは言えるが、また内外・東西・古今にわたる比較考証はドイツ語、フランス語、ラテン語の文献にまで及んでいる。夏のさ中二週間ほどかけてようやく読み終えたが、総括にあたる最後の三章はひきずりこまれるほどの迫力があつた。

著者の熱い想いは、やはり原文に接しなければわからない面があるのではないだろうか。

本書の構成は次の表のとおりである。

TABLE OF CONTENTS		
Publisher's Foreword		ix
Preface to the First Edition		xi
Introduction		xv
Chapter I	<i>Bushido as an Ethical System</i>	1
Chapter II	<i>Sources of Bushido</i>	7
Chapter III	<i>Rectitude or Justice</i>	15
Chapter IV	<i>Courage, the Spirit of Daring and Bearing</i>	19
Chapter V	<i>Benevolence, the Feeling of Distress</i>	25
Chapter VI	<i>Politeness</i>	35
Chapter VII	<i>Veracity and Sincerity</i>	43
Chapter VIII	<i>Honor</i>	51
Chapter IX	<i>The Duty of Loyalty</i>	57
Chapter X	<i>The Education and Training of a Samurai</i>	65
Chapter XI	<i>Self-Control</i>	71
Chapter XII	<i>The Institutions of Suicide and Redress</i>	77
Chapter XIII	<i>The Sword, the Soul of the Samurai</i>	91
Chapter XIV	<i>The Training and Position of Woman</i>	95
Chapter XV	<i>The Influence of Bushido</i>	109
Chapter XVI	<i>Is Bushido Still Alive?</i>	115
Chapter XVII	<i>The Future of Bushido</i>	125
Index		132

「第一版への前書き」に著者が本書を著した契機が端的に書かれている。

十年ほど前、著名なベルギー人の法学者ドゥラヴリー氏と歓談している際「あなたの方(日本)の学校では宗教教育がないのですか。」と問われ、私(新渡戸)がうなづく、「宗教がないのですか。あなた方はどのようにして道徳教育を伝えるのですか。」と反問され、答えに窮した。

また妻の「日本で一般的な思想や慣習がなぜそうなるのか。」というしばしばの問いかけも、自分にこの問題を考究させる要因となった。

答えを模索していく間に、新渡戸は「封建制と武士道の理解なくしては、現在の日本の道徳観念はわからない。」その武士道は封建制がなお生命をもっていた時代に、自分の若い日々教えたものである。」

ことを改めて認識するに至る。

続いて本書の内容を概観してみよう。

第一章・第二章では武士道の歴史的な淵源が述べられ、続く第三章・第四章で武士道の二つの柱とも言うべき「義」と「勇」がとりあげられ、さらに第五章の「仁」・第六章の

「礼」・第七章の「誠」・第八章の「名誉」・第九章「忠義」へと論旨が発展していく。

各章とも内外、古今の具体的な事例を綿密に考証しつつ、武士道を構成している諸理念を鮮かに解き明かしている。

第十章「武士の教育と修練」は東北盛岡藩の上級武士の三男に生まれた新渡戸自身が身につけた体験をもとに述べられ、損得勘定を越えた生き方に究極の価値を見出す精神が培われていたことを物語っている。

第十一章「克己」・第十二章「切腹」・第十三章「刀」では武士の生き方、死に方を示す事例が迫力ある筆致で語られている。

第十四章「女性の修練と地位」は第十章に呼応する章であり、武士道の倫理は男女で表裏一体となって完結することが語られ、興味深い。

夫・家・家庭に対する妻の献身は、夫の主君と国に対する献身と全く同質で、自発的で名誉ある行為であり、夫・妻双方にみられる

「自己否定」こそ武士道倫理の根幹をなすものであった。

第十五章「武士道の影響」・第十六章「武士道は甦るか」・第十七章「武士道の将来」は本書の総括にあたる部分で、著者は熱のこもった筆致で論を進める。

最終章の中で新渡戸は語る。

一八七一年の廃藩置県は武士道の吊鐘であり、さらに五年後の廢刀令はソフィスト（詭弁家）や金権主義者や計算高い人々が幅をきかす時代が到来したことを示した。

だが、もっともすぐれた思想をもつ日本人の内面に立ち入ってみると、人々はそこに「サムライ」を見出す。

さらに、日露戦争での日本の勝利は、村田銃やクルップ砲の威力、日本の近代的教育制度がもたらしたものであるという説は事^{こと}の半面をとらえているに過ぎない。

日本の勝利の真因は日本人の父祖伝来の精神の力であり、その底流には武士道の精神が脈々と流れていると説く。

「日本と欧米をつなぐかけ橋になりたい。」と生涯希求し、努力した新渡戸はすぐれた日本精神の体現者であった。

最後に寸感を一つ加えたい。

この著作を読みながら、私は明治・大正・昭和初期を生きた日本の知識人の卓越した語学力にあらためて感じ入った。

それは新渡戸に限ったことではない。

維新後東北二本松の貧しい士族の子に生まれ、苦学力行、渡米した朝河貫一は、エール大学に職を奉じ、比較法制史の世界的権威となった。

彼の朗々たる講義は、英米人の学者と全く遜色のない格調の高い英語であったと言われる。

彼らのひとかたならぬ向学心や努力は言うまでもないが、二人に共通するのは幼少年期に漢文の素読をたたき込まれた体験である。

幼少年期にきびしく鍛えられた頭脳が外国語を学んでいくうえで大きな力になっていたのではないだろうか。

『BUSHIDO』を通してわれわれが学ぶことはまだまだ尽きないようである。

(平成二十八年十二月十日記)

科学論文の現状

高橋 正彦

1 感想を述べる論文類は左の5通りである。
(是等は全て、年輪の鉛汚染を扱う。)

イ 「空中塵の鉛の自然対する影響」 一九八二年/室住正世(室工大名誉教授)等

ロ 「屋久島の岩石・土壌及び屋久杉年輪」

一九九二年/岩松暉(鹿大)・室住正世

ハ 鹿児島大学応用地質学科HP(かだいおうち) 一〇〇〇年本学科消滅のウェブ記念版

ニ 中村精児等 「人為源空中塵の屋久杉への」 室工大紀要五〇巻二〇〇〇・一一

ホ 岩松暉「かだいおうち二〇一六年改定版」

2 鉛汚染の経年変移 に関する予備知識

日本人の血中の鉛濃度は一九七六年 $10\mu\text{g}/\text{dl}$ と高いが、九〇年迄には $2\mu\text{g}/\text{dl}$ 迄に下降する。

大気中の鉛濃度も七六年 $1.0\mu\text{g}/\text{m}^3$ から九〇年以降には $0.1\mu\text{g}/\text{m}^3$ にまで低下する。また、血中鉛の影響は恐ろしく、 $10.0\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超えると知的能力に欠損を生ずるとされる。

3 本邦大気中の鉛 は一九七五年のガス中の鉛添加剤禁止以降、急激に濃度が減少した。(なお屋久杉年輪中の鉛の最高濃度は一〇年前より、 $114\text{ ng/g} = 0.114\text{ }\mu\text{g/g}$ — 屋久島の相対的汚染度はかなり薄い事に注意されたい。)

追伸 $\text{mmg} = 0.001\text{g}$, $\mu\text{g} = 0.001\text{mmg}$

即ち $\mu\text{g} = 1/10^6\text{ g} = 1\text{g}/\text{百万}$ を意味する。

4 本論で述べる趣旨

—— 右の諸「科学論文」はデータの年代記述が極めておかしい。また年輪中のデータに関し、図上で示されるものの、何の注記のない点(図の y z) が存在している

この様な主張をするのは、年輪データが、【基準年より】

(10, 20, 30, 50, 60, 80, 100年前) とされた場合、図に見る通り、

【基準年を一九九二年】

とすると、【八〇年前】

とすると、【八〇年前】

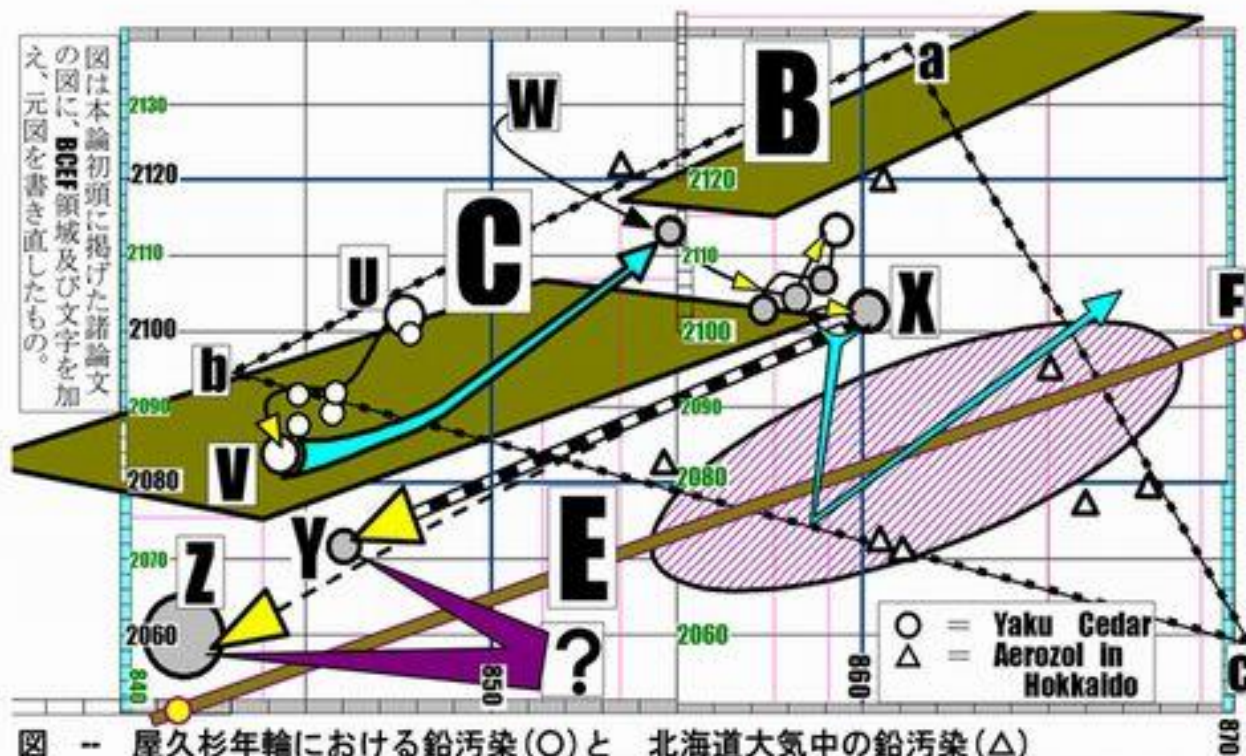


図 -- 屋久杉年輪における鉛汚染(O)と 北海道大気中の鉛汚染(Δ)
年輪はU.V.W ⇒W.X.Y(Z)の通り変移したと推定する。V(100年前)からW(80年前)の変移幅は極大、点Y・Zに関し何の記述もない。点WはAB領域に属さない特異点(華南五部鉱山由来か)。

図のW】は一九一二年となり、データのUV WXYの流れの中で極めて異質で変移幅の大きな時期で、これは第一次大戦期の亜鉛増産期に、従前使用の本邦亜鉛・鉛(C域)に対し、華南産品を大量輸入した事実と大略一致する。

——この一致には信憑性がある。

ところがこの基準年(年輪の鉛の測定年)に關し(ローニ)上には明確な記述がない。

そこでは等論文の著者(室住名誉教授は既に故人、中村氏等は所在不明)の中で、鹿児島「防災研」の岩松氏が当人と見て、点WYZの実態・測定方法に關する照会を行った。然し何の回答も無きまま突然、(ハ)が全く判読不能(全面的り弁状態)となり、十一月に至り全面が更新された(二)を発見した。

(一)では全図表が鮮明に書き直され、闇雲に点Z(又はY)が削除され、新たに屋久杉採取年を【一九八二年頃】とする「第2回地質学会大会議事録中の、岩松教授・室住(矢崎総業)「共著」の口演要旨」が添付された。

然し是を以てしても、室蘭系のデータでは鉛汚染の時間的、座標空間的変異への関心が皆無であり、変異の重大な特質を逸失している。この誹りを免れ得ない。

これ等の内で最も詳細な分析手順の記述があるのは、(イ)室住ら、八二年)であり、年輪資料は「1.2cm * 10cmのコアサンプル」によるとある。これは約一〇年幅のアウトな年代資料であり、これ以外に厳密な年代確定をした形跡がない。これ以降の(ローホ)はこの記述を避けたと見ざるを得ない。また(ホ)では、年輪採取は「八二年頃」とするが、採取当事者(著者)岩松教授・室住研究員)が「頃」と曖昧に主張するのは、極めて不可解である。

5 曖昧な年輪年の推定される背景

これ等の背景には一九九二年以降の屋久杉の完全伐採禁止がある。この流れの中で伐採採取を可能ならしめたのは、鹿児島大のコネであり、ここから土砂災害専門の(専門外の)岩松氏が屋久杉の鉛汚染論文(ロ)において主著者となり得た模様である。また、さほど禁制の厳しくない一九八二年を採証年とぼかし、採取年に近い樹皮(Y・Z)のデータ値は削除したが正式な論文公開を憚り十年後の公開(二)に至ったと推定する。この他に公開に長年を要する困難があったとは考えられない。

【恐らく実際の採証年は(ハ・二)の直近の一九九〇年頃であろう】

6 屋久杉の鉛データの実際の年輪年代

【1980年を伐採年と仮定すると、八〇年前】は 1910年頃

——但しサンプルには約一〇年の幅があり、実際の年次はその中間の一九一五年前後の、鉛汚染濃度の最も高かった年代、(一九一四年)を示している可能性が高い。

7 本論における方法の総括

屋久杉の鉛汚染に關する科学論文(イ)ホ)の些細な【齟齬を検討】し、実際の伐採年 1990年には不都合があつたと推定した。

また、この判断の大枠には日米に渉る鉛汚染のN字状の経年変移がある。(第一次大戦による鉛値の急増とその後の急減)——急減はガス鉛中の北米産鉛の大气汚染の増大による。

図の▲は北海道諸都市の大气汚染であるが、大部分が北米産鉛である。(原著にはBCDEFなる領域概念がないので、この重大な事実には気が付かない。是が本邦科学の現状である。)

今年読んだ本から3冊

平山善之

① 暗黒の大陸 ヨーロッパの20世紀

マーク・マゾワー (株)未来社

② ザ・カルテル

ドン・ウインズロウ 角川文庫

③ 中国 消し去られた記録

城山英巳 (株)白水社

二〇一六年の国際社会は、難民の奔流、街角で頻発するテロ、大衆に迎合する政治等に瞠目させられた。

これらをどう理解したらいいのか、どう対処すべきかなど考えながら、何冊かの新刊書を手にした。その中からご紹介する。

① 本書は英国人歴史学者によって九八年に書かれ、一五年邦訳された。

著者は、現在の立ち位置を知るためには、辿った道を知らなければならない、とする。

振り返ってみれば、ヨーロッパ大陸は非民主的、非人道的、差別的な潮流が地下水として流れている大陸なのだ。共産革命、スターリニズム、ファシズムなどは偶然の産物などではない。

八九年のソ連崩壊は民主主義の勝利ではなく、資本主義の勝利だったという側面は見逃してはならない。民主主義は確立していない。いつ地下水は地表を覆う洪水となるか、わからないのだ。

しかし、我々アジア人からみると、今難民が生まれているのは全てヨーロッパ人が植民地支配をしていた地域である。難民に苦勞しているのは、自らの果実を刈り取っているようにも見える。

② ニューヨーク生まれの作家による小説。

トランプ氏がテキサス国境に壁を造ると主張した。安い労働力による製品の流入のみならず、麻薬の流入も凄まじい。需要側が悪い、と我々は思うが、彼は二千年前の始皇帝の如く長城で防ぐつもりらしい。それも笑えないほど麻薬問題は深刻なのだ、ということを実感するのが本書である。小説であるから、すべて鵜呑みにはできないが、死者の数などは事実であろうし、個々の事件も事実をもとにしているという。軍や警察も自陣営に取り込んだ、「カルテル」と呼ばれる麻薬業者の集団による、暴力・殺人・拷問は我々には想像もできない。

最近日本でも麻薬常習者は増えているという。芸能人逮捕のニュースもあいついでおり、

この小説のようにならないよう、嚴重に防衛すべきであろう。

③ 副題に『北京特派員が見た大国の闇』とある。

時事通信社記者として十年に及ぶ中国での取材に基づき記録。言論の自由を掲げ、弱者の代弁者たらんとする改革派弁護士たちの活躍と、これを弾圧する中央、地方の政府の実態を明らかにする。

中国共産党は「中国には中国式の自由や、民主主義がある。欧米の言う自由や、民主主義が絶対的なものではない」として、腐敗を攻撃する弱者を「騒動を起こそうとする反国家的行動」として拘束、司法はこれに従う。

しかし、自由とは「体制に反対する自由」という点で、普遍的でなければならない。一党独裁が何にも優先する社会は間違っている。今の体制が一日も早く崩壊することを私は望むが、著者は既存の報道が共産党に関心を置きすぎだと主張する。一元的な見方ではなく、複眼で社会の現象を見ていかなければ、中国は理解できず、中国を理解しようとするのが、今大変重要だとする見解は至言だと思う。

「商工農士」の米国

新井 宏

ベネチアの例に出すまでもなく、歴史的に見ても、通商国家が常に豊かであった。現在も、一人当たりGDP基準で、世界第一位はヨーロッパの金融センター・ルクセンブルク(十万ドル)、第二位は匿名口座で富豪の秘匿資産を集めているスイス(八万ドル)、眼をアジアに転じて、カジノの国マカオ(七万ドル)が世界第四位、いわば通商国家である前に「お金の取引」を主産業としている国々が豊かである。

アジアでマカオに続くのが、新興通商国家のシンガポール(五万ドル余)と香港(四万ドル余)で、日本の(三万ドル余)を既に大きく超えている。もともと、日本の場合、東京都を独立国と捉えれば、一人当たりのGDPが倍増するのでがっかりする必要は無い。

その一方で、現代の最貧国は北朝鮮(六百ドル)で、同等レベルの国がアフリカに数カ国あるだけである。しかも、北朝鮮はGDPに占める軍事費比率が二十四%と突出している。

特殊事情下にある産油国、サウジアラビアやオマーンの約十%よりもはるかに高く、四%前後の軍事大国、米国、ロシアや中国はもちろん、二%以下が大多数の中で、極めて異常なのである。日本は周知のように一%であり、最も比率の低いのが、高所得国のルクセンブルクの〇・五%とスイスの〇・七%である。

そこで、江戸時代の「土農工商」の序列を思った。もちろん、これは統治政策であり、経済的な豊かさを示す指標ではなかったが、もしも現在の国家を「土農工商」で分類したらどうなるだろうか。豊かさの順番で言えば、おそらく逆の「商工農土」になるに違いない。

現代社会において、「土」は軍人・官僚・教育者・宗教人など、「農」は農業・林業・牧畜・漁業にエネルギー・鉱業などを加えた一次産業、「工」は繊維・機械・鉄鋼・造船・電機・電子・建設などの二次産業、そして「商」は金融・経済・交易・流通・観光・学芸などの三次産業が該当しているのであろう。

そんな奇妙なことを散歩しながら考えたのは、アメリカ大統領に大方の予想に反してトランプ氏が当選したからである。

超大国の米国は、「土農工商」の全ての面で、圧倒的な強みをもっているが、なによりも世界の超軍事大国である。しかも農業大国であり、穀物類で一億トン以上も輸出している。

だから「土農工商」の国かと思えば、第一次産業に第二次産業の工業を加えてもGDPの二十%に過ぎず、残りの八十%が第三次サービス産業なのである。いわば典型的な「商工農土」の国であり、それを認識したからこそ、米国はTPPを本気で推進する気になったのであろう。

トランプ氏の支持層は内陸部にある。地政学的に内陸部は軍事的・専制的な農業国家「土農工商」に成りやすいが米国は海洋国に变身したことで現在がある。沿岸部のカリフォルニア州では独立運動さえ起きていたとか。米国は本当に内向的な「土農工商」の国になり得るのであろうか。

(本稿は『計量新報』の求に応じて執筆したものであるが、ページあわせに転載した)

会員の平山善之さんが、主として『史遊会通信』に掲載したエッセイ等を纏めて、『歴史のさんぽみち』を上梓しました。既に、著者より直接皆様にも紹介されていると思います。

その中に、平成二十四年『史遊会通信』掲載の講演要旨「多賀城碑」の改稿があります。当時の「講演要旨」は、配布資料の添付がなく、要約しすぎていて、意を十分に伝えることが難しかったので、資料もあわせて「講演記録」として、書き直されたものです。

この改稿文は、学術論文としても十分に通用する高度な考察を含んでおり、インターネット上でも閲覧できる『史遊通信』にぜひ載せたいと考え、ここに再録いたします。(編集人 新井宏)

史遊会通信二一一号(平成24・7・15)

六月講演要旨(改稿)

多賀城碑の「蝦夷国界」はどこか？

平山 善之

多賀城碑とよばれる石碑に刻まれた、「蝦夷国界」とはどこか、という話をします。

通説では、岩手・宮城両県の県境付近とされています。しかし、私は宮城・福島両県の県境だと考えています。この説をとる人は、

私の知る限りでは古田武彦氏くらいです。私なりにその理由を、独断・偏見・管見を恐れずにお話したいと思います。

—

まず、多賀城の話です。

仙台市の北東約十二キロ、塩釜港の裏山のような所に、大和朝廷が築いた陸奥国の国府が、多賀城です。石碑の文言によれば、神亀元年(七二四)大野東人が創建しました。

文献では天平九年(七二七)、続日本紀(以下、続紀と略す)に「多賀柵」、宝亀十一年(七八〇)「多賀城」の記述があります。

その存在は早くから知られていましたが、本格的な発掘調査は昭和三十年代以降で、その後も新しい発見が多くなされています。

少し横道にそれますが、多賀城は東の大宰府だったという説があります。

以下、発掘調査に深くかかわった、前国立歴史民俗博物館館長平川南教授の説のご紹介です。

多賀城の近くに「多賀城廃寺」という寺の址があり、寺号不明でした。昭和五十八年、国司館あとから、「観音寺」と書いた墨書土器が発見されました。九州の大宰府に、観音寺があります。この廃寺も観音寺だったのでは

ないか。これが東の大宰府だったのでと類推される理由のひとつです。また、この頃の城柵が地名で呼ばれたのに、この土地は多賀といいません。常陸国多賀郡の多賀ではないかと言われてきました。多賀郡からの移住者の居た所ではないかと。しかし、多賀郡は「高国造」の高で、茨城県の高地の意が、元明天皇の好字二字を地名とせよという勅で付けられた郡名、とされます。平川教授は大宰府が中国古代の官名であるように、多賀も中国に典拠を求むべきとされ、中国の古鏡に

四夷服 多賀国家人民息 胡虜殄滅 天下復 (四夷が征服され、多く国家に賀あり。人民安んず。胡虜は滅び、天下元通り)

とあるのから取ったのではないかと言われます。対蝦夷最前線にふさわしい銘です。

また、多賀城所在の「宮城郡」ですが、八世紀前半の窯跡から出土した須恵器に書かれており、多賀城創建時には建郡されていた、従って、多賀城イコール「遠の朝廷」即ち天皇の居るところ、ということになるのではないかと。いかというわけです。

さて、考古学上の発掘調査の結果、創建は七二〇年代前半、その後七六〇年頃、七八〇年、八六九年と三回建て替えられていること

が判明しました。三期の七八〇年は伊治公咎麻呂が焼き払ったため、四期の八六九年は貞観大地震で倒壊したため、と明瞭です。

二期目の七六〇年頃、というのが、まさに石碑を建てた朝獺あさかの事業ではと想像されます。石碑に刻まれた天平宝字六年はまさに七六〇年に当たります。

二

次に多賀城碑の話に移ります。多胡郡の碑、那須国造碑と並んで三大古碑と言われます。

多賀城へ行ってみますと、南門の前に小さな鞘堂に覆われて、高さ二メートル幅一メートルほどの石碑が建っています。彫られた文字は懐中電灯で照らさないと読めませんが次の通りです。まず上部の真ん中に大きく「西」と一字が書かれています。その下部に

多賀城去京一千五百里

去蝦夷国界一百廿里

去常陸国界四百十二里

去下野国界二百七十四

去靺鞨国界三千里

西

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山

節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獺修造也

天平寶字六年十二月一日

と刻まれています。

江戸時代の万治・寛文の頃、出土状況は不明ですが、この石が陸奥国宮城郡で発見されました。元禄年間、水戸のご老公・光圀が、領主伊達綱村に親書を送り、大事なものだから、鞘堂を作り保護したほうが良いと勧めたという話が残っています。彼は修史に注力し自領から出土した那須国造碑の保存にも注力しています。価値が分っていたのでしょうか。

平安時代、寂蓮法師の歌に

みちのおく 壺のいしづみ有とときく

いづれか恋のさかひ成らん

という歌があり、他にも慈円、西行なども「壺のいしづみ」を詠んだ歌があります。

壺の石とは、陸奥国の境界か中心かに立っている石、とされ、歌枕となっていたようです。発見された当時の人は、この石碑を「壺のいしづみ」と思い込んだらしく、芭蕉は出土から約三十年後に「奥の細道」の中でこの石を「壺のいしづみ」と呼んでいます。

しかし、文面からすれば、多賀城修復記念碑であることは明らかです。

発掘のときから、この石が本当に奈良時代のものか否か、真贋論争がありました。明治の歴史学者や書家が偽物であると断定したため、戦後まで誰もまともに研究するものがありませんでした。しかし、多賀城の発掘調査が進むにつれ、本物説が高まり、現在それが通説となり、国の重要文化財に指定されています。

標題に掲げたテーマ、「蝦夷国界はどこか」というのは、この石に彫られたように多賀城から一百廿里の所にあつた「蝦夷国界」、それは現在のどこか、という話です。

一百廿里という距離は、奈良時代は「唐尺」が使われていましたから、現在の尺度に直すと約六〇キロです。これは歩いて二日くらいの行程ですから、都や靺鞨とは違ってこの碑を見る者は誰でも「ああ、あそこだな」と理解出来たはずの距離です。極めて具体的なところを差しています。碑の前に立ってこれを読んだ人達が、どこを思い浮かべたでしょう？。

冒頭に申し上げたように、通説では岩手県と宮城県の境近辺、としています。

しかし、私は以下のような理由から、宮城県と福島県の境、伊達郡国見町と考えます。

- ① 碑面上部に大書された「西」は、その下の境界は西に向かって測る事を指示する。
- ② 「蝦夷国」とは律令国家の支配圏とは無関係である。
- ③ 国造制度が及ばぬ地域に住む人を蝦夷と呼んだ。国造の北限は宮城県南部。
- ④ 平泉藤原氏は蝦夷であり、彼らは、国見町を以て自領の防衛ラインとした。
- ⑤ 国見という地名と国境にふさわしい地形。

以下、各項ごとに説明します。

三

碑に書かれてある内容は幾つも不明な点があります。

「多賀城碑 その謎を解く」(安倍辰夫・平川南編 雄山閣出版)という本があります。何人かの専門家がそれらの謎に答えようとされています。

中でも一見して不思議なのは、大書された「西」の一字でしょう。石碑は数多くありますが、西に限らず、東でも南でも、方位をこのように大きく、しかも頭部に刻まれた例

は他には見られないそうです。平川教授は右の本の第七章「碑文の検討」を執筆されて「里程」・「蝦夷国と靺鞨国」・「東人と朝獺の官位」・「その他」と四項目に分けて先人の説も含めて詳細に論じておられます。「西」の問題は「その他」の中で次のように述べられています。

碑額の西については、従来、専らその意味を類推することにとどまっている。例えば、「西は京都を尊崇するの意なり」(山田聯「多賀城碑面考」)、「西と書きたること、此石西に向きたればいふと、方角をしらすべきためなり」(角懸俊郷「府土万葉集」巻四、宮城郡)など種々の憶測が述べられている。この西の意味を断定する決定的根拠が見当たらない現状では、これ以上の憶測を加えることを避けたい。ただ、古代において、碑額はわが国では多賀城のみであるが、中国では古碑のつねである。しかし、碑額に「西」と記された碑は管見の限り、例を知らないことを記しておく。

根拠がないから、謎は謎のまま、というわけです。

しかし、古田武彦氏は昭和六一年の講演で次のように憶測しています。

「西に向いているから西と書くんだつたら、どの石碑だって、東とか北とか書いてあってよさそうなものですが、他には全くないです。(中略)私が思いますのは、これだけ大きく西と書くというのは、読者に、下の文章を読む場合【西】を忘れてくれるなという注意を喚起した書き方だと思ふのです。それとも一つ。〇〇里、〇〇里と書いてあります。倭人伝から古代史に入った私にとって、特に印象的なんです。これには必ず方角がつくんです。」

この見解はなぜか現在まで全く無視されているようですが私は納得性あるように思います。古田説について平川教授も全く触れていません。専門外の人間の発言は取り上げない、という雰囲気を感じられます。

古田武彦氏は史学会では異端とされ、私も賛同しかねる説もありますが、本件については最も合理的な説であると思います。理系の歴史学者として著名な新井宏博士は「確かに、バクトル表示でなければ、場所は特定できませんね。」と私に言われました。

多賀城から西に蝦夷国界を求める場合、岩手県側に求めるでしょうか。福島県側にも求めるでしょうか。どちらにも真西というわけではありませんが、岩手県は北と言ってよく、福島県は南西でしょう。西に括ってよい方角です。下野・常陸の方角とも矛盾しません。

四

次に、この石碑に書かれた「国」の概念はどういうものか？です。

京は平城京、即ち奈良の都のことで何ら疑問の余地はありません。「下野国」も「常陸国」も、それぞれ首長、つまり、守、介（次官）掾などが任命され、首府である国府が定められた版図を差し、国境線も明確で問題ありません。蝦夷国と靺鞨国というのが明らかに異なる概念です。靺鞨国は大陸の沿海州にあった国で外国ですが、当時は近代国家とは見方が違って、外国という認識はあまりなかったから、ここに登場したのでしょう。問題は蝦夷国をどう定義づけるかです。

平川教授も先にあげた「多賀城碑その謎を解く」という本のなかで詳細に論じておられます。ただし、靺鞨国は七ページ、蝦夷国は二ページと蝦夷国についてはむしろ簡単です。

教授は江戸時代はこの蝦夷国界を桃生郡のあたりとされていた、と述べ、

「むしろ問題となるのは蝦夷国界という認識である。つまり、律令国家の支配に服しない民を蝦夷と呼称しながらも、そこに蝦夷国という政治認識を持ちえたかどうかという問題である。」

当時の『続日本紀』などの文献からは、蝦夷国の把握の仕方をはつきりとうかがうことはできない。」

とされています。そして、日本書紀の崇峻天皇二年七月と齐明天皇五年三月のくだりに「蝦夷国」という表現があることにふれて、

「斉明紀の記載などはまさに八〜九世紀にかけての蝦夷征討と対比されるべきものだけに、その記事に明確な蝦夷国の表現を確認できるとするならば、碑の蝦夷国界も当時の律令国家側の認識として、不自然なものとはいえないであろう。むしろ、律令国家の版図を示す意味でも、ことさらに蝦夷国と規定するところに意義があるのではないだろうか。」

と書かれています。

要するに、通説は「律令国家の版図をしめす意味で、未だ従わざる地域をあえて蝦夷国

と規定した。」として、今の岩手県以北を蝦夷国としています。

私は、蝦夷国は「大和政権から蝦夷と呼ばれた人たちが主に住んでいたところを、朝獺は蝦夷国と言った。」と理解したいのです。律令国家の版図を示したのではない、と。

五

蝦夷とはなにか。字面からすれば東方の化外の人への蔑称であろうと思います。

ただ、その特性は剽悍で強い、と理解され、蘇我蝦夷のように、強さにあやかりたい人名前として用いたのでしょうか。

蝦夷の概念について、国造制と結び付けて説明される説が多いようです。

今泉隆雄東北大学教授は

「大化改新の段階で倭政権が国造制の施行された外側の住民を蝦夷として把握していた」（『宮城県史』山川出版社）
熊谷公男東北学院大学教授は、

「国造制は六世紀前半から半ばの時期にかけて成立したとみられるが、これに右の綾糟の服属儀礼の記事を考えあわせる」と、国造制の成立にもなって蝦夷観念が形成されたとみるのが、もっとも可能

性の高い想定のように思われる」(「蝦夷の地と古代国家」山川出版社)

と書いています。お二人とも国造制を意識しています。

そこで国造制ですが、「先代旧事本紀」巻十によれば、最も北の国造は伊具、亘の二つ、いずれも宮城県的最南部です。

菅野静観氏(中尊寺仏教文化研究所)は

「伊具・亘理の両地域こそ遡れば国造制の北限地帯。つまり、伊具・亘理の両地域は蝦夷地の南限にして境界の要地にも相当した。」(「古代蝦夷と古代国家」高志書院)

菅野氏のいう蝦夷地の南限が即ち、朝獺のいう蝦夷国界というのが私の見解です。

井上通泰という人が

「鎮守將軍の職はただ辺境を成るのみにあらず、漸次蝦夷を駆逐するにあれば、征討功を奏せば蝦夷国家は次第に加遠せむ。之を常陸下野の国界の如く固定のものとするは何の意なるかを知らず。」(「上代歴史地理新考」)

と述べたそうで、加遠とは、段々に北上した、という意味でしょう。現在の通説もこの線上にあります。

しかし、思うに律令国家の版図に編入された後も蝦夷たちの多くは原住地に住み続けたに違いありません。皆が北へと駆逐されたわけではないのです。大和政権は、戦前の日本軍が中国でそうであったように点と線を抑えていたにすぎません。面は蝦夷たちのものであった。面を自分たちのものとすべく移民政策がとられますが、それはこの後で、しかも激しい抵抗を招き、いわゆる三八年戦争を引き起こしています。朝獺から五十年近く後に、征夷大將軍坂上田村麻呂は戦争準備を、遠く下総国印波郡(成田市江弁須)に本陣を置いて始めたということは、版図内といえども宮城県あたりはまだ敵地であって、兵站や補給には不適であったことを証明しています。

通説論者は言うかもしれません。「朝獺は征夷の功を誇るべく、この碑を建てた。もし多賀城も蝦夷国の中だったら、版図を広げたことにならないではないか？」と。

私は、多賀城は蝦夷の勢力圏にある、その土地の中で築城・大改修という仕事を成し遂げた、その偉業を人に知らせるためにこの碑を建てた、と思います。敵の勢力圏に深く進み入ってこの偉業を立てたと。征夷の功というより、城修築の功です。遙々も来たるもの

かな、というのが彼の感懐だったのでないでしょうか？それを実感してもらうために京や靺鞨国からの里程まで刻ませたものではないでしょうか。

六

次にお話したいのは、時代が三百年ほど下がりませんが、平泉藤原氏との関連です。

藤原泰衡が、北上する頼朝軍を迎え撃つべく防衛陣地を築いたのは阿津賀志山、即ち福島県伊達郡国見町です。「吾妻鏡」にその戦闘の様子が詳しく記録されています。平泉府は白河から青森県の外ヶ浜まで支配したといいますが、白河は陸奥国の境ではあっても、藤原氏の実効支配は宮城県以北だったのでしよう。代々、境を固めていたのは、佐藤庄司という腹心の侍でした。義経に従って平家追討で名を挙げた、佐藤継信・忠信の実家です。平泉藤原氏は蝦夷であった、と私は考えています。

通説は京の藤原氏の子孫が在庁官人として勤務しやがて土豪として支配権を握った、だから蝦夷ではない、としています。

東北大学高橋富雄教授は

「清衡の父常清がおそらく国司の一員(權守もしくは介)として下向し、その

ままた着し、安倍氏の婿となり土着化していったのである。」(「奥州藤原氏」・吉川弘文館)

とされていますが、同書の中で

「藤原氏のように、在地の立場や利害を、全面的に組織した族長氏族が、歴史的に蝦夷であるという点は、それによって何ら変更されるところがないのである。」

とも書かれています。血族的には藤原秀郷流の坂東武士だが、やはり蝦夷だと。

蝦夷とは「奥羽の辺境にあつて、中央とは著しくその政治・文化の性格を異にする人たちに對する古代人の侮蔑を示す呼称」と定義づけられています。

工藤雅樹元東北歴史博物館長も

「経清は藤原秀郷の5代の孫で、父を頼遠といつた。経清は『造興福寺記』によつて、永承二年には陸奥に在国していることが「知られる。」(「平泉藤原氏」無明舎出版)

「造興福寺記」とは藤原頼道が、氏寺・興福寺再興のため、一族に寄付金を募つたなかに、五位の部に「経清六奥」とあり、六奥とは陸奥のことで、経清も一族として応分の寄付をした、というものです。

私は一歩進めて、血族としても都の藤原氏ではなかつたであろうと考えています。

藤原頼長の日記「台記」で「基衡を匈奴」と呼び、(仁平二年九月十四日)九条兼実の日記

「玉葉」で秀衡を「夷狄」と呼んでいます。(嘉応二年五月二十七日)

極端にいえば、蝦夷の頭領が東北の財力を以て、カネで買ったのではないかと。これは、安倍氏、清原氏も同様です。安倍氏について秋田大学の新野直吉教授は

「貞観季から元慶二年まで鎮守將軍に赴任した安倍朝臣比高(ちかたか)、元慶八年から二年ほど將軍であつた安倍三寅あたりが最も結びつきやすい存在である。少なくとも彼らを中心に八世紀の延暦期から十世紀半ば天慶ごろまでの間に、現在の岩手県南部に行政・軍事の権力を掌握行使していた安倍氏と在地の豪族勢力がむすびついたものと考えられる。」(「多賀城と古代東北」吉川弘文館)

都の安倍氏と、在地豪族勢力の合体という折衷的な考えかたでしょうか。

前九年の合戦時の巨権太夫藤原経清は安倍頼時の婿でした。この三氏は蝦夷の頭領を名乗っていますが、都の貴族が東北の地へやつ

て来て、蝦夷を統べる頭領になれるでしょうか？文献をみると、前九年合戦を描いた「陸奥話記」には安倍氏を「東夷の酋長」と記しています。有名な「中尊寺金堂落慶供養願文」の中で藤原清衡は自ら「東夷の遠酋」「府囚の上頭」と称しています

前九年、後三年の合戦のころ、この三氏は、北上川、雄物川、阿武隈川という交通の要路を抑えて、勢力を分かち合つていたように思います。お互いに通婚もしていました。いわば広域連合を結んでいたのです。都から下つた経清一代の話ではないでしょう。

これは桓武天皇が対奥州戦争をやめたのち、今度は蝦夷内部で激しい勢力争いが続き、統合を重ね、二〇〇年ほどを経てこの三氏に収斂した結果ではないでしょうか？そしてこの頃になると、かつてアテルイとかウクツハウとかモレとか呼ばれていた蝦夷たちも畿内政権との交流を通じて名前を変え、都の貴族名を冒用するようになった、というのが私の考えです。冒用するにあつて都と折衝し、それなりの対価を払うという条件で取引したであろうことは想像に難くありません。都のそれら貴族にとつても、己の家名を名乗る者が出羽・陸奥に君臨することは勢力拡大に資す

るうえに、東北の金や馬、鷹の羽、毛皮等々の貢ぎ物の魅力には抗しがたく承認したものでしょう。大体、都風を吹かす官人が、下向早々に蝦夷たちの頭領として権力を握れたはずがないと私は考えるのです。

さて、前九年・後三年の合戦を経て藤原清衡が奥羽の覇者となり、平泉に府をおきました。平泉は実質自治政府の首都であり、鎌倉幕府に先立つ、平泉幕府と言つてよいものであつたと、高橋富雄教授が詳細に論じています。高橋教授はなお清衡を藤原秀郷流とする視点を捨てていませんが、私は蝦夷幕府であつたと思っています。平泉は多賀城以下の征夷の為の諸城と全く異なる、正反対の性格を持つ、と唐木順三氏はいいます。背後から脅かす者はなく、北方に対しての防備は不必要であつたと。(続あずまみちのく「清衡考」)

畿内政権に対峙するが北は全て同族という安心感があつた為でしょう。芭蕉が「奥の細道」で「泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり」と書いたのは唐木説に反しています。

この藤原氏が敵を迎え撃つ防御陣を敷いたのが国見町、ということは、伝来の蝦夷国の境界であつたればこそ、と私は考えています。

七

私は国見町を四度訪ねて、阿津賀志山にも三度上りました。

この山の上から見下ろして、その都度、ここが、いかに要害の地であるか、また国境と言ふにふさわしいかという思いを深くしました。

昔の東山道(奥州街道)現在の東北自動車道、東北本線、東北新幹線、あらゆる道が二キロほどの狭い地域に集中しています。東に阿武隈川、西に奥羽山脈がせまり、喉首のようになっているからです。

国見という地名、これも東山道の宿駅として古くからの地名です。およそ、国見というのは六十余州それぞれの国境の地に付けられる地名・山の名でした。舒明天皇の国見の歌は、都にあつて支配下の国を見る、人民の暮らしを見やるといふもので、意味が違います。

ここは陸奥国の真中で国境ではありません。人もあまり住んではいなかったでしょう。大和人がやって来て、そこから先は「蝦夷びとの住む国だなあ」と感慨を込めて見やった土地という思いがします。だから国見町なのです。

国見町は伊達郡ですが、伊達には「いでたつ」という意味がある、とする説があります。これも国境にふさわしい地名のような気がします。(ついでながら、伊達政宗の先祖は常陸の中村氏、藤原秀郷流と称して頼朝の配下でしたが、阿津賀志山の合戦で戦功をあげ、この地をもらい、苗字にしたということでもあります。)

また、通説で蝦夷国界とされている岩手県との県界も度々足を運びました。多賀城から六十キロというと、栗原市あたりです。栗原市は大きく広がる水田地帯です。一関まで行けば山や川があり、国界らしい風景がありますが、少し里程がありません。

以上五つの理由から、私は、蝦夷国界は国見町だ、と推測します。(了)